

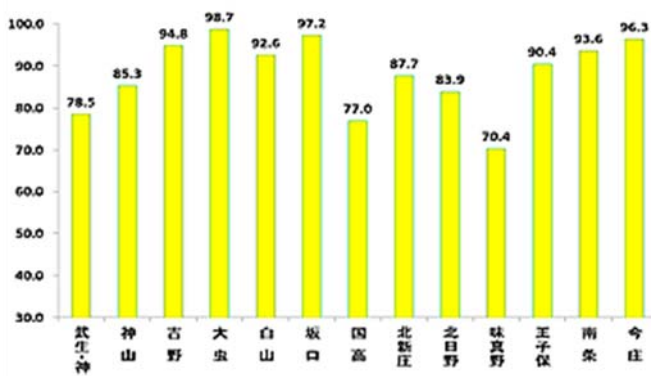
# 平成28年産米の作柄概況について

■ コシヒカリ、高温登熟回避で品質・収量ともに良好 ■

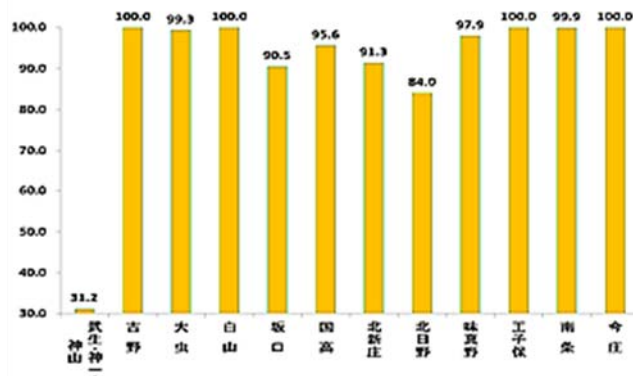
平成28年産米の作柄は、田植え期から出穂期までは高温多照で経過したことから、茎数は「やや多い」となりました。登熟は、出穂期以降、おおむね天候に恵まれ順調に推移したことから作柄は、「やや良」となりました。

しかしながら、日本晴については9月に入り、雨の日が多く、特に台風16号の影響とその後、高温、長雨が続いたことから、穂発芽による品質低下がみられました。

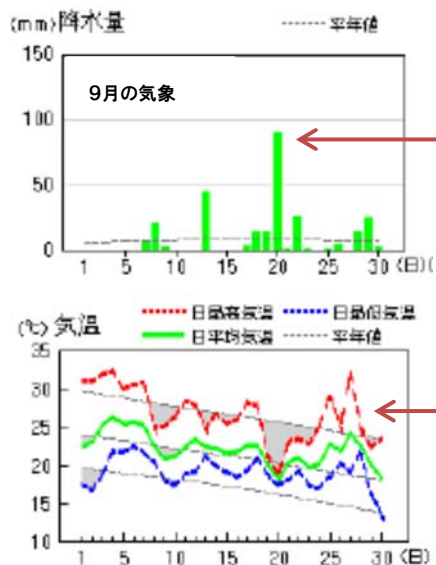
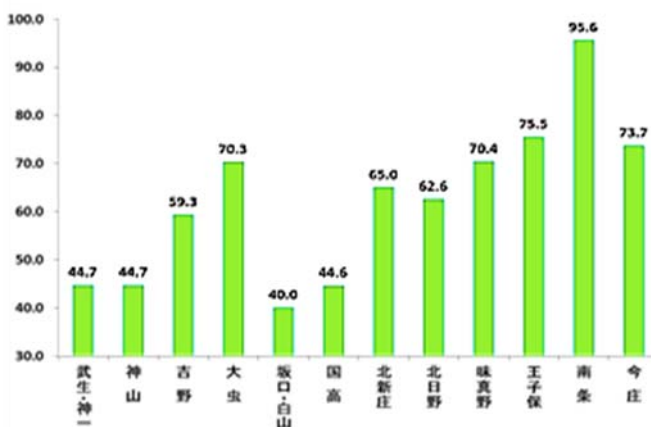
コシヒカリ（倉前）上位等級比率 90.0%



あきさかり（倉前）上位等級比率 94.8%



日本晴（倉前）上位等級比率 63.9%



平成28年産米 肥料試験・生育調査圃場 脱穀調査平均データ

品種名	調査点数 (点)	粗玄米重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	網下重 (kg/10a)	網下率 (%)
コシヒカリ	8	588	532	56	10.5
あきさかり	6	630	555	75	13.6
日本晴	18	619	589	30	5.1

# 秋の田起こし3つのポイント

～ 土づくりと秋の田起こしで気象変動に負けない稲づくりを ～

## ポイント ①

### 今より3cm深耕（目標15cm）

効果：根が張る領域を増やし、水分・栄養分を吸収しやすくする。さらに、ワラもすき込み易くなる。



## ポイント ②

### 稲わらの早期すき込み腐熟促進

効果：栄養分、団粒構造で（ワラは全量、堆肥は1t）土を肥やす。来春、移植時期に稲わらをすき込むと代掻きや田植作業がやりにくいだけでなく、硫化水素や有機酸の発生により、根がダメージを受ける。



## ポイント ③

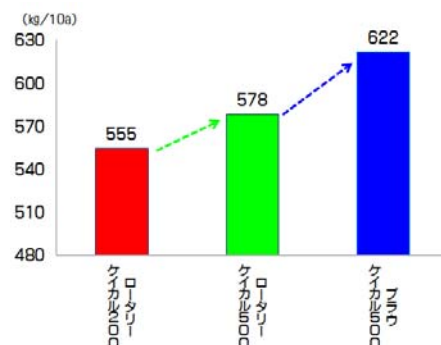
### 土壌改良資材（粒状しきぶホワイトなど）の施用

効果：ケイ酸質資材の施用により地力UPを図り、異常気象の条件下でも登熟歩合や整粒歩合を高める。

平成28年産米 土づくり資材試験圃場 脱穀調査平均データ

品種名	資材名	全重 (kg/10a)	粳重 (kg/10a)	わら重 (kg/10a)	粗玄米重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	網下重 (kg/10a)	網下率 (%)
コシヒカリ	無散布	2,192	816	1,376	512	478	34	7.1
	しきぶホワイト	2,220	809	1,412	548	510	38	7.5

砂壤土や礫質など、地力が乏しい圃場では土壌改良資材の選択の前に、深耕による根の生育範囲の確保や地力窒素の有効活用が極めて重要です。根の伸長の促進と生育期間中の栄養凋落状態を回避したうえで、ケイ酸資材などを併せて施用することが、収量や品質の向上につながると考えられます。（平成26年産試験データ右図参照）



♪ 平坦地での特別（有機質肥料）栽培の場合、けいふん等の投入により、腐植を高めつつ初期生育を確保するようにしましょう。

平成29年産 日本晴の収量向上は土づくりと深耕から！

深耕・土づくりのどちらからでなく 両方あわせて実施を！